

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2020年1月31日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信59号

茅刈技術研修・ボッチの作り方

■ 9月後半～1月の活動報告(事務局).....	1
■ 楽習会(下流圏会員親睦プログラム).....	2
「上野村森林セラピー」	
◇開催報告(稲 貴夫)	
◆塾長の感想(草野 洋)	
■ 2019 定例活動⑤.....	4
「茅刈技術研修・茅葺講座」	
◆開催報告(草野 洋)	
◇茅葺講座(稲 貴夫)	
◇参加者感想(佐藤 健司)	
■ 麗澤中学校奥利根フィールドワーク.....	8
◆実施報告(草野 洋)	
■ 茅刈り合宿.....	9
◇実施報告(草野 洋)	
□ 上ノ原の広場の看板をリニューアルしました.....	9
■ 2019 定例活動⑥.....	10
「茅出しと山の口終い」	
◆開催報告(草野 洋)	
□ 今年度の茅束生産数.....	11
■ 藤原現地事務所報告(北山 郁人).....	11
「上ノ原の間伐材がこけしの材料に」	
■ リレー投稿・第四回.....	12
「最近のこと」(海老沢 秀夫)	
■ 野守のつぶやき(清水 英毅).....	13
編集後記	(敬称略)

【9月】

●22日、23日 楽習会(下流圏会員親睦プログラム)にて、上野村森林セラピーに参加。二日目は上野村の歴史と文化を探索。会員8名参加。

【10月】

●19日、20日 一般参加プログラム⑤「ふるさと文化財の森で茅刈実技研修・茅葺講座」実施。会員16、会友8、町内2、合計26名(うち日帰り4)のほか、茅葺文化協会から11名、イオン財団から2名、読売新聞1名の参加あり。また、地元読売新聞の取材もあり報道されるなど盛況。

みなかみ町からは職員2名が助勢、車も2台提供いただく。はじまりの式では鬼頭町長、赤谷センター佐藤所長より挨拶。

●19日 夕食後に茅葺講座を実施。筑波大学生命環境系准教授の廣田 充先生から「半自然草原、茅場をめぐる人間活動の意義を考える：長野県北部の茅場の事例から」と題して講演いただき、茅葺文化協会上野理事の進行でパネルディスカッションが行われた。(刈茅実績等は、本文記事参照)

●20日、21日、22日 「茅刈合宿」実施。地元勢だけでなく、首都圏勢の有志が古民家に宿泊し、たくさん刈ろうとの趣旨で、6名が参加。

●20日 現地幹事会実施。参加者5名(現地1、首都圏4) 来年以降、活動主体を現地化する問題について議論。

●30日 麗澤中学校「フィールドワーク」実施。4クラス153名を8グループにわけインストラクター15名(首都圏6、日光4、新潟1、地元4)で指導

【11月】

●16日、17日 一般参加プログラム2019⑥「文化財の屋根を修復する茅ボッチの茅出し&山之口終い」実施。会員12、会友1合計13名参加(うち日帰り1名)

【1月(2020)】

●25日、26日 流域連携活動として、小貝川(25日)、菅生沼(26日)の野焼きに参加。詳細は次号で報告予定。

(以上)

下流圏会員親睦プログラム 「上野村森林セラピー」

報告 稲 貴夫

本年度二回目の下流圏会員学習会は神流川源流の村、上野村において9月22日より2日間の日程で開催し、会員8名が参加しました。上ノ原で計画しているヘルスツーリズムの参考にと、森林セラピーを体験するとともに、上野村の歴史と文化を訪ねることが目的です。

初日朝、高崎駅に集合した参加者はレンタカーに乗り込み、10時前に森の体験館に到着。原則日曜日に開催される森林セラピー体験のこの日の参加者は、青水の他に東京からきた二人組の計10名。受付を済ませ、森林セラピストの中村さんから説明を受けた後、マイクロバスでセラピー基地の中之沢源流域へと向かいました。

バスは県道から外れると、作業道を整備した細い道を進みます。山側も谷側も急峻な険しい山道です。

最初のスポットは、遊歩道を沢まで降り下ったオボロカヤの



オボロカヤの滝への遊歩道を進む

滝の周辺。オボロカヤはアイヌ語で水溜まりという意味。この滝の近くに木製デッキが設えてあり、そこで15分ほど滝の音を聞きながら交代でシートに横たわったり、滝壺で飛沫を浴びながら過ごしました。

デッキの反対側にシオジの大木があり、草野塾長が溪流を渡りシオジの根元まで行きました。隣に人がいると予想以上に大きいことが



わかります。(写真・左)

次は「森のレストラン」で地元の食材を使った特製弁当の食事。もちろん電気はなく、壁がガラスブロックを嵌めた鉄骨で、小屋組みが木材の十坪程の建物。食事の後は岡田さんが抹茶を点てて

全員に振る舞いました。

昼食後は、沢筋のルートを上流へと歩きました。苔むした岩肌に広葉樹が根を張り、奥入瀬溪谷のような雰囲気があります。標高も千二、三百メートルあるためか、少し霏がかかってきました。

中村さんは森林セラピーの効用は、医学的な研究からも裏付けられていると強調されました。森林セラピー協会の役員には登山家の今井通子さんはじめ医師の方々が多数おり、森林と身体との健康との関係を医学療法的な側面から明らかにする研究が進んでいるとのこと。また、今年の五月に森林セラピーの世界大会が上野村で開催された際には、海外からの参加者は、「日本の森はどこからでも水が湧き出ている」と驚いたそうです。上ノ原のヘルスツーリズムの原点は、やはり「飲水思源」であると感じました。帰りに、「しおじの湯」に立ち寄り温泉で汗を流して、森林セラピーの全行程を終えました。

宿泊先の民宿「不二野家」には5時頃到着。不二野屋の主人の黒澤さんは猟師でもあり、夕食には熊と猪の肉がでました。鉄板にバターをひき、塩コショウをたっぷり降って良く焼くのがコツとのことで、臭みもなく美味しくいただきました。

日航機の墜落時、黒澤さんは消防団員で、事故当時の話や神流川発電所などについての話も伺うことが出来、思わぬ「車座講座」となりました。

2日目は朝食後、近くの諏訪神社にお参り。板葺きの舞殿があり、藤原の諏訪神社と同じくお祭りには獅子舞が奉納されるようです。(写真・右)

8時過ぎに宿を出て上野ダムに向かいました。上野ダムは隣の長野県にある南相木ダムとの落差を

利用した揚水式発電用のダムです。群馬県側の地下に、揚水式では日本最大級の東京電力神流川発電所がつくられています。



ダムの上から記念撮影



続いて黒澤家住宅へ。屋根は勾配の緩い板葺き石置き屋根で、百坪はある大きな民家です。(写真・下) 上野村で茅葺きの民家は見かけないのは、急峻な地形のため茅場ができなかったからかもしれません。二階は上野村の民俗資料が展示されていました。



続いて、日航機事故の犠牲者をまつる慰霊の園へと向かいました。

慰霊碑にお参りした後、展示室で事故の模様を伝えるパネルなどを見学し、映像も鑑賞しました。事故の教訓として、自衛隊、警察、マスコミなどが情報を共有することの大切さを訴える、黒澤村長はじめ当時事故処理に関わった上野村関係者の言葉が印象的でした。この慰霊の園は、身元を特定できない遺体を弔うため黒澤村長の呼びかけで村民が土地を提供したものです。



最後に、神流川支流の沢筋にかかる吊り橋、スカイブリッジを見学。(写真・左) 全長は225メートルで、橋上から眼下90メートルの谷底から天空

へと広がる緑の山々の姿を堪能しました。

森林セラピー以外にもいろいろ学ぶことの多い楽習会となりました。

塾長の感想

「憧れのシオジ大木に遭えた」

草野 洋

群馬県上野村での森林セラピー体験に参加して是非とも見たい樹と訪れたい場所があった。

見たい木は「シオジ」。シオジは、モクセイ科 トネリコ属でアオダモやヤチダモの仲間である。九州ではシオデと呼ばれ、漢字表記は、「柎樹」「柎櫓」。冷温帯の溪流沿、いわゆる溪畔林を構成する。本州四国に分布し群馬県利根村が北限、生育地としては秩父山地が有名であるが群馬県上野村北沢溪谷(国有林)のシオジ原生林は国の天然記念物。上野村は秩父山地に接する。

シオジは樹高が高く30m超となる。幹は通直で完満、直径1.5m以上、単幹性(株立ちしない)、葉は奇数羽状複葉で小葉は7~9枚、雄株と両性株がある。翼を持った種子は風で飛ぶが遠くへは飛ばず、稚樹は耐陰性が強い。材は建築(建具・床柱)、家具、テーブル、バット、楽器、ピアノ外板、木工品(漆器)などで銘木となる。サワグルミ、カツラと混交する傾向がありアワブキ、フサ

ザクラ、チドリノキが下木層にある林相となりスズタケは少なくなる。

これだけの予備知識を持って上野村神流川源流の中之沢へ向かった。

シオジは奥多摩などで幼木や幼齢木は見ているが大木にはこれまで出会えていない。前橋営林局(関東森林管理局)の勤務時代に、上野村の国有林のシオジの大木の話聞いて、一度は見たい憧れの樹である。本当は北沢溪谷の原生林を見たかったが、片道3時間と聞けば二の足を踏んでしまう。

さて、中之沢のシオジ。落差20mのオボロカヤの滝の対岸に大木があった。対岸に渡るのは少し難儀だが、ここまで来てそばに行かないのは折角逢った愛しい人の体温を感じないで帰るようなもの。ガイドさんに許してもらって大木のそばへ。

樹高は35mを超し胸高直径も100cmはある。樹

皮は浅黒く荒い。思った通りの樹であり胸がキューンとなりおもわず抱きついてしまった。株の周りをまわってみるとふかふかの良い土壌で、これだけの樹高を支えるため根も深く広く張っているだろう。シオジと混交する樹も下木も地表植生も予備知識のとおりである。稚樹の発生も確認。葉っぱは高くとても取れないが稚樹で確認。シオジに出逢えて感激の森林セラピー体験。

そして行かなければならない場所は、日航機墜落事故の犠牲者を祀る「慰霊の園」。墓石に刻まれた520名の名前、事故の記録と当時を振り返るビデオを見ると今更ながらに悲しみが襲ってくる。この方々はまさかの突然の死に直面して何を思っただろう。この方々の生きたかったとの想いと、犠牲者の救助に奔走し、心から嘆き悲しみ、遺族を慰め、そして事故を繰り返してはならないとの上野村村民の想いがひしひしと伝わってくる。自分の生き方を見つめてしまう場所であった。



上・堂々たるシオジの大木 下・樹肌



2019 定例活動⑤ 茅刈り 茅刈技術研修・茅葺講座を開催 草野 洋

森林塾青水は、2003 年、当時の水上町と無償借地契約を交わし、2004 年から「上ノ原茅場」の茅場再生作業に着手したので、今年はちょうど 15 年目となる。そして、折しも 3 月には文化庁の「ふるさと文化財の森」に指定された。これは、文化財建造物の保存修復のために必要な資材を安定的に供給することを目的とする取り組みであり、茅葺屋根の材料を供給してきた上ノ原は、それにふさわしい新たなステータスを得た。そこに一般社団法人日本茅葺文化協会からイベント共催の申し出があり、今年の茅刈は、この二つを記念して、茅の品質向上と技術の伝承を目的に規模も大きくして「茅刈実技研修・茅葺講座」と銘を打ち、令和元年 10 月 19 日、20 日の両日に実施した。

例年ならば紅葉真っ盛りのはずであるが、今年の季節はかなり遅れて、シラカバが少しばかりの黄葉、オオヤマザクラが赤味を出している程度でカラマツもみどりであり、気候変動をもろに感じさせる茅場風景となっている。ススキは、尾花がそれなりのたれ具合であるが葉や茎はまだみどり色、刈った茅のクオリティーに影響することは確実である。



今年のこの時季の茅場風景、シラカバは黄葉



カセンソウが
まだ咲いている



アケビもあり
秋の気配も

には、青水の募集に応じた参加者 26 名、茅葺文化協会の応募による参加者 11 名、みなかみ町鬼頭町長をはじめとする役場関係者、関東森林管理局赤谷ふれあい推進センターの佐藤所長、イオン環境財団、地元・町田工業茅刈衆約 10 名、総勢約 50 名が参集して、今にも振り出しそうな天候をにらみながら実施された。

はじまりの式のあと、地元および町田工業の茅刈衆の指導のもと茅刈講習会を行う。

今年は品質向上がテーマの一つであるので、束の大きさ、雑草を混ぜないこと、茅を使った伝統技術の結束、倒れないボッチの作り方をお手本も示しながらポイントを繰り返し丁寧に指導してもらった。

写真・右
萬枝師匠の
茅刈講習（倒
れないボッ
チの作り方）
写真・右下
頼もしい師
匠の笑顔
写真・下
茅場に響く
鎌の音



そのあと、茅場の方々に散らばり、茅刈り衆の指導を受けながらの茅刈を行う。

雨は降りだすのを待ってくれているようで約 2 時間の作業を



行い、休憩の合図で広場に集合してもらったと同時に降り出してそのままやむ気配がない。「この雨はやまないな」という



風馬（祈祷）旗、タルチヨを掲げて
歓迎準備



鬼頭みなかみ町長が挨拶

雲越萬枝師匠の観天望気で作業中止を決断。少し早めに宿に引き上げる。

夕食時の「ロッジとんち」の食堂はほぼ満杯、そのあとの車座講座（パネルディスカッション）「茅場と茅葺の現状と課題」と交流会の様子は稲幹事の報告に譲るとしてこれまでにない有意義なものとなった。

その夜は強い雨が降り続いたようであるが朝になるとあがり、6時半の雲越家での早朝講座（ワークショップ）「茅葺屋根の特徴と茅の使われ方」（稲幹事報告）を終えて朝食のころは青空も見えるほど回復した。

2日目は全員で茅刈であるが、昨日の講習を成果を試す「茅刈検定」の受験者10名を募集したところ6名が受検を申し出て、検定が始まった。



上・茅刈検定の受験者は
飲水思源ハットを着用
左・鎌の音も
検定の対象
下・若い茅葺
職人も挑戦、
見事茅刈士
補に



茅刈検定は青水独特の検定でこれまで4回ほど実施され7名の茅刈士補を輩出している。検定は基礎知識、安全作業、基礎技術、技術向上、技術志向の

観点からの18のチェック事項が水準に達しているかどうかを1時間の作業で判定し、18項目達成で茅刈士、14項目以上で茅刈士補の称号が与えられる。今回は最高17項目、最低12項目でレベルが高く5名の方が茅刈士補に認定された。

茅刈は、11時半まで行われ、バッサバッサの鎌の音、汗を拭い、時には腰を延ばし、ボッチに抱き付き縛るのに奮闘する姿が茅場のあちこちで見られた。概算であるが参加者が刈ったビッチ数は65ボッチとなった。



カヤボ
チの立つ
風景



自分のボ
ッチの前
で



物産館の
出張販売

車座講座（パネルディスカッション）

「茅場と茅葺の現状と課題」 稲 貴夫

夕食終了後の7時過ぎから二時間半にわたり、多彩なメンバーによる講座と討論が、日本茅葺き文化協会の上野事務局長の進行で行われました。

最初に筑波大学で植物生態学、生態系生態学を専攻し、長野県小谷村で「茅場プロジェクト」を進める廣田充さんより、「半自然草原、茅場をめぐる人間活動の意義を考える：長野県北部の茅場の事例から」と題して基調報告があり、続いて質疑応答及び参加者からの事例報告と進んでいきました。後日、日本茅葺き文化協会より詳細なが作成される予定ですが、概要のみ取り纏めて報告します。

《基調報告》

1. 草原、半自然草原の特徴

飼料や堆肥、屋根材など、かつて草原に求められていた資源の供給が不要になった結果、日本の草原は減少を続けてきたが、現代においては伝統文化の継承の他にも新たな価値や機能が明らかになりつつある。その一つがCO₂の吸収機能である。

草原にはCO₂を吸収し土壌に蓄積する働きがあり、その蓄積量は、主に樹木にCO₂を蓄積している森林に匹敵する。そのメカニズムは次の通り。



廣田さんの基調報告

日本の草地に多い黒ボク土は、火山灰にイネ科の植物遺体が混ざり、長い時間をかけて形成される黒色の土壌である。イネ科植物はプラントオパールと呼ばれるケイ酸を多く含んでいるため腐植となっても分解されにくく、土壌に蓄積される。また、火入れで炭化した植物遺体も残るため、炭素が蓄積した黒ボク土が形成されてゆく。

こうした草原が不要とされ放棄されると、森林化が進んで腐植の化学的性質も変化して分解されやすくなり、土壌の黒味が抜けて褐色森林土に変化していってしまう。

2. 茅場プロジェクトの紹介

半自然草原である茅場が持つ様々な機能を明らかにし、良質な茅を持続的に生産するための方途を探り、そして茅の生産・利用に関する多くの伝統知の科学的な裏付けを得ることを目的に、茅場プロジェクト（正式名称は「農資源としての茅生産に欠かせない茅場の多面的評価」）を立ち上げた。

フィールドである小谷村の牧の入り茅場では、大茅（ススキ）よりも小茅（カリヤス）が良質とされるが、それらが混在しているため、良質な小茅が集中する場所の特徴を明らかにするための調査研究を進めている。

3. 牧の入り茅場の維持に必要な人間活動の影響

牧の入り茅場では雪解け直後の火入れと刈り取りで草原を維持しているが、ハギ優先区、ススキ優先区、カリヤス（良）優先区、カリヤス（低）優先区の4地点における土壌の「柔らか度」や、窒素・ケイ酸・リン酸などの養分量を測定したところ、土壌が柔らかい方が茅は良質で、養分についても各地点により差が大きいことが明らかとなっている。茅場を維持するための人間活動が土壌にも影響を与えていると思われ、良質な茅を持続的に生産するためにも、他の環境要因も含めた詳細な継続調査が不可欠である。

これまでの調査から一つの仮説を提示すると、高低

差のある草原では火入れと刈り取りの繰り返しにより、高い地域から低い地域へと表土が流れて表土の性質が変化し、良質な茅の分布を制限する要因の一つになっているのではないかとすれば、茅場を維持するためには、表土が流れにくい刈り取りや表土管理が必要になってくると思われる。

《質疑応答及び事例報告》

○青水の草野塾長が上ノ原ではススキの生育の悪い区域に試験的にミズナラ林の腐葉土を散布していると事例報告。廣田さんは、ススキは枯れることで自分のエネルギーを土壌に回収しており、枯れないうちに青刈りすると養分が土に戻らないので、刈り取りの時期を遅らせるという方法もあると説明。

○みなかみ町エコパーク推進課の高田課長が、みなかみユネスコエコパークの中での上ノ原の位置づけや取り組みについて報告。

○群馬県内で文化財建造物の保存に取り組む町田工業の町田社長が、50年にわたる上ノ原での茅利用の経験を踏まえ、昔の方が品質の良かったことを指摘。また、県内に五棟ある茅葺きの重要文化財建造物などに利用するため、一万束の茅を保管していることや、県内の茅場について、最近では中之条にダムの残土を利用して茅場を造成したこと、また中之条の富澤家住宅の葺き替えでは3600束の茅を使用したことなどを報告。

○青水の西村幹事が『うえのはら お散歩手帳』を使って上ノ原の自然について報告。日本自然保護協会の朱宮さんは、上ノ原の草原としての特徴や価値について、森林塾青水の継続的な活動の支えがある草原であることが



西村幹事が「上ノ原」について説明

特に素晴らしいと発言。

○青水の清水顧問からの茅葺屋根の住宅が数多く建造されているオランダの状況や、森林や草原の持つ機能の貨幣価値についての質問に対して、千人の茅葺職人がいて茅を輸入しているオランダの状況や、生態系サービスを経済的価値に換算する手法について、専門知識を持つ参加者が説明。

○その他、「そうふけっぱら」など千葉県の草原を調査してきた東邦大学大学院の野田さん、地元藤原地区に移り住み上ノ原で活動が続けてきた青水の北山塾頭、住居と人間の健康の関係から百年杉の普及に取り組む加藤木材の加藤社長、猿ヶ京で茅葺き古民家を守る林さん、小谷村で茅葺職人に弟子入りした日大大学院生の塚本さん、庭師として修業する筑波

大大学院生の伊藤さんが、それぞれの活動事例を報告。

○最後に茅葺き文化協会の安藤邦廣代表理事が、草原は茅葺き屋根だけでなく、養蚕と桑畑の関係のように馬産とも深く関わってきた。草原と茅葺き民家の問題はそれぞれ単独で考えるのではなく、社会経済的側面から全体像を描き、つなげていきことが大切であると締めくくり、車座講座は終了しました。また、参考書籍として『茅葺きの民俗学』（1983、安藤邦廣著、はる書房）、『日本茅葺き紀行』（2019、日本茅葺き文化協会編、農山漁村文化協会）の二冊が紹介されました。



茅葺きの民俗学



『日本茅葺き紀行』

早朝講座（ワークショップ）

2 日目は朝 6 時半に宿を出発し、すぐ近くにある重要有形民俗文化財の雲越家住宅資料館において、早朝講座として茅葺き見学のワークショップ「茅葺き屋根の特徴と茅の使われ方」が行われました。まず、雲越家住宅の保存事業に携わってきた町田社長



さんが屋根を指し示しながら、兜造りで芝棟に煙り出しがあり、軒付けに麻が使われている雲越家住宅の特徴を説明。参加者からは、芝棟は萱葺き以前の土葺きの名残であるとか、垂木のピッチが細かいのは雪国の特徴であるなどの話が続きました。



軒下で屋根の特徴を解説

茅葺き屋根の様式には多様性があり、日本各地でそれぞれ特

徴がありますが、意外にも外国によく似た様式も見られたりすることもあります。

その他、日本における茅葺きの始まりと稲作との関係など、一時間ばかりの間でしたが茅葺き談義に花が咲きました。

参加者感想

「ふるさと文化財の森」で「萱刈実技研修・茅葺き講座」に参加しました 佐藤 健司

森林塾青水の主催により、みなかみ町藤原「上ノ原入会の森」で「萱刈実技研修・茅葺き講座」が行われ参加してきました。

「ふるさと文化財の森」とは、国宝や重要文化財などの文化財建造物を修理し、後世に伝えていくためには、木材や檜皮・茅・漆などの資材の確保と、これらの資材に関する技能者を育成することが必要です。このため、文化庁では、文化財建造物の保存に必要な資材の供給林及び研修林となる「ふるさと文化財の森」の設定、資材採取等の研修、普及啓発事業を行う「ふるさと文化財の森システム推進事業」を実施しており、文化庁に認定されたものが「ふるさと文化財の森」となります。今現在全国で 80 箇所認定されており、今回講座が開催された「上ノ原入会の森」も平成 31 年 3 月 20 日に認定されており、77 番目に認定された箇所になります。ちなみに群馬県では今のところ唯一指定されている箇所になります。森林塾青水が茅場の保全に着手して 15 年、当時は雑木もかなりあったとのことですが今ではいい茅場になったとのこと。

講座は、塾長・草野洋さん、みなかみ町長、日本茅葺き文化協会・事務局長上野弥千代さんの挨拶にはじまり、その後講習会・実技へと移りました。講師は地元の雲越萬枝さん。華麗な鎌さばきを披露しつつ、抱刈りから一束直径 20cm にまとめ、それを更に五つ束ねてボッチの完成です。その後一月ほど乾燥させてから出荷となります。開会式までは小雨でしたが、その後は晴れ間も出て、蒸し暑い中大汗をかきながら参加者全員頑張っておりました。

今回の講座は 19 日は夜 22:00 まで、20 日は朝 6:30 からワークショップとタフな内容となっておりましたが、やる気のある参加者が集まり、有意義な 2 日間となったとのこと。参加者の皆さんにはこの経験を活かし、今後も茅場の保全について継承して行って貰いたいと思いました。（赤谷森林ふれあいセンター所長・「赤い谷のブログ」より転載）



麗澤中学校 奥利根フィールドワーク

草野 洋

今年も、10月30日、麗澤中学1年生を紅葉もようやく進んだ上ノ原茅場に迎えました。

前日、インストラクターは強い雨の中フィールドを下見し、鎌研ぎやススキの穂の採取などの準備を行った後、彼らの幸せと安全を祈るためチベット仏教の祈祷旗「タルチョ」を立てて本番に臨みました。

今年のメニューは、昨年と同じ、森林草原観察、茅刈体験、草原で遊ぼう（茅束とフクロウのススキクラフトづくり、目隠しトレイル、草原からのハガキづくり）、雲越家住宅見学の4種のメニューで、4クラス8グループ153名にインストラクター（東京組6名、日光組4名、新潟から1名、地元4名）がそれぞれのところで生徒を待ち受けて指導しました。それぞれのメニューに取り組む様子を写真で紹介します。

◇森林草原散策◇



湧水「ははその泉」で森林の水源かん養の説明。今、触っている水は8年前に頂上に降った雨。昨夜、頂上に降った雨は君たちが20歳になったときここに湧き出るよ



年輪を数えてみる



この色は空気、水、土、温度、湿度、樹木が取り込んだ栄養でできた自然にしか出せないよ



◇草原で遊ぼう◇

草原でどんな遊びができるかを説明



上・ススキの穂の準備しておきました

右・生徒たちが作ったフクロウなどの作品



目隠しトレイル（目隠しで張ったロープを伝って歩く）

◇茅刈体験◇

目標 1 グループ 1 ボッチ



今年の麗澤中奥利根フィールドワークは、前日の雨、そして当日の上ノ原集合の遅れによる一部グループのメニューの省略、座観場所の倒木が搬出されてしまうなどアクシデントもあり、疲れもひどかったが、インストラクターの皆さんの奮闘で何とか終わることができました。

皆様、ありがとうございました。

今年も茅刈合宿—少年茅刈士補も誕生—

草野 洋



賑やかで有意義な茅刈のイベントが終わった 20 日の午後。風にたなびくタルチョと飲水思源の手拭が寂し気ではあるが、今日から古民家に合宿して藤原の茅刈衆とともに 2 泊 3 日の茅刈である。

茅束をできるだけ生産したいとの思いで昨年からは始めたもので、まったくのボランティアである。

今年は、草野、松澤、稲の幹事連中に、藤岡夫妻そして中学生の Y 君が参加してくれた。

茅刈は重労働である。初めに私が萬枝さん直伝の茅の抱え刈りを教え、後は稲さんがボッチの作り方などを指導。2 ボッチを作るころには、独り立ちするぐらいに上達し、2 日目には稲さんと 9 ボッチを作った。この活躍に、彼に、「少年茅刈士補」の名称を与え特別認定書を与えることにした。



宿泊場所は、今年も古民家に寝袋持参で 2 泊、食事は自炊で、風呂は湯の小屋温泉に遠征。昨年と違ってまだ温かくカメムシが集団冬眠していないので悩まされずに済んだ。

合宿のたのしみは食事と酒盛り。疲れと腰痛をこらえて囲炉裏の火起こし、飯炊き、おかずづくりを分担する。最初の夜に「豚汁」を大鍋にたくさん作ってこれを 2 泊 3 日持たせることにして、豆ごはん、アジの干物、ゆで卵、ご当地の野菜でおいしくいただく。そして、ビールと日本酒が疲れを吹き飛ばす。Y 君はよく気が利く少年で大人と一緒にかがいしく働く。

2 日目の夜、テレビもないのでラグビーの日本 VS 南アメリカ戦が気になる中、北山塾頭が「敗戦」の情報とともに仲間入りして現地幹事会、議題は今後塾の活動主体をどう現地に移すかである。

少年茅刈士補は、食事のあとカードゲームをしたかったようであるが酔眼で議論する大人たちを見てあきらめた様子。そして疲れもあったのか寝袋に潜り込んで健やかな寝息を立てていた。

2 日目は天気も良く、ボッチづくりは捗ったが、お天気祭りの度を過ぎたのか、3 日目は朝からシトシト雨で作業中止とした。

ことしの合宿は天候に恵まれなかったが、それなりに楽しかった。とくに、Y 君の参加がうれしく、彼にはご褒美にボッチ券で買った藤原のお米 5kg を家族へのお土産として持って帰ってもらった。

上ノ原の広場の看板をリニューアル

草野 洋



上ノ原の茅場の広場の看板を修復しました。

この看板は、上ノ原での活動開始と同時に設置したもので、15 年間広場で上ノ原を紹介し続け、時には積雪の深さの指標となりました。地元水上工房製で頑丈な作りですが 15 年もたつと塗料もあせて、屋根には腐れも出てきたことから塗りなおしと補修を水上工房にお願いしたところ、茅刈イベントの前に、より凛々しくなった姿で広場に戻ってきました。

修復に要した費用は、会員の池田忠子様のご芳志を充てさせていただきました。

池田様は、野焼きのころ「会のために自由に使って」と申し出て下さり、幹事会でどのように使うかを検討したところ、気になっていた看板の修復費用の一部に使わせてもらうことになりました。茅場らしい姿を取り戻した上ノ原の文字通りの看板娘としてこれからも見守っていくことでしょう。

塾は皆様の温かいお心に助けられて 15 年間継続することができ、これからも活動を続けていきます。



2019 定例活動⑥ 茅出しと山の口終い

草野 洋

茅刈から約1か月、その後、降霜は何度かあったようであるが寒風と言えるものはなかったようで、ボッチの乾燥具合が気になる中で、茅出しを11月16、17日に行った。

参加者13名。茅出しは重労働なので、人数は多いほど助かる。

上ノ原に着いてみると武尊山は冠雪している。ボッチを触てみると軽くなっており乾燥具合もそこそこよろしいようである。すでに町田工業のトラックが到着して一部を積み



込みしている。昼食を済ませて茅出し開始であるがその前に、茅刈の時に検定を受け、今回茅出しに参加している小林さんに茅刈士補の認定書の授与を行った。（写真・上 二日目参加の斎藤さんには翌日授与し、他の認定者には郵送）

雲越萬枝さんと渡邊さんが刈った茅束は3000束（600ボッチ）と報告を受けている。

そのほか、合宿やボランティアが刈ったボッチが少なくとも120ボッチあり、全部で720～750のボッチがあるので、平均すると一人当たり60ボッチを運び出さなければならない。

今年のボッチは強い風が吹かなかったこともあるが、茅刈講習での萬枝さんの指導よろしく倒れているボッチが少ない。倒れたボッチは乾燥していないので重く、品質も落ちる。茅出しに参加すると正しいボッチづくりと倒れない立て方が大切なことがわかる。



立っているボッチと倒れたボッチ 倒れたボッチは水分を含んで重いため運ぶのも大変な上、品質も落ちる

ボッチの穂をもって斜面を曳きづり出すので、下りは良いが上りは2倍ぐらいの重さに感じる。来年

からは茅刈の時に、刈った茅をどこに出すかを考えて刈るようにしたい。

参加者はノルマを示されたからか、明日の雨予報もあつてか休憩なしで精を出し、明日に残るかと思われたボッチの全てを運び出してしまった。

この日の宿は並木山荘、重労働で疲れた体が温かい

風呂とおいしい夕食で癒された。

2日目は、やはり雨、吐き出す息が白く、気温も低い。昨日で茅出しが終わったので、今日はもう少し茅刈をするつもりでいたがあきらめてトラ



ボッチを縛って曳きづり出し、道路端に積んでいく



ック積み込みに専念することにした。トラックが到着する前に北山さんが炭焼きを始めていた炭窯を見ることにした。

トラックが到着

トラックに積み込んで作業は無事終了。最後に山の口終い

するとみんなで積み込み、昼前には2台が満載。

120ボッチぐらいが残ってしまったので明日以降の運び出しを町田工業さんをお願いして、自然の恵みをいただき、無事に1年を終えたことを十二様に感謝する山之口終い神事を行った。



2019年度に生産した茅束数は、 3,775束でした

11月16, 17日に運び出した茅ボッチは全量、町田工業に引取られました。

その内訳は、藤原茅刈衆の雲越萬枝さんの刈り取り数1,300束(260ボッチ)、渡邊勇三さん1,700束(340ボッチ)、ボランティア(合宿刈りを含む)775束(155ボッチ)で、合計3,775束(755ボッチ)となりました。

これは昨年(3,430束)より多く、青水が茅刈を



始めた2007年から4番目に生産数が多い年となり、目標としている古民家一棟分の束数を確保できました。今年は天候

に恵まれず減産となる見込みでしたが、茅刈イベントへの参加者が多かったことや、合宿での頑張りが功を奏したのと、地元茅刈衆には昨年より500束も多く刈っていただきました。地元茅刈衆には環境保全作業協力金として塾から1束35円の上乗せをしました。

雲越萬枝さんから今年を終わっての次のようなコメントをいただいています。

「大変お世話様になりました。寄る年波で身体がだんだん・・・、丈夫であれば来年もよろしくをお願いします。」

きっと来年も今年以上に頑張っていただけだと思います。地元茅刈衆に加え、今年茅刈士補になった会員を含めた茅刈合宿を続けて自然の恵みをいただき続けます。



藤原現地事務所報告

上ノ原の間伐材がこけしの材料に

北山 郁人

上ノ原入会の森で間伐したミズキを榛東村にある「卯三郎こけし」でこけしの材料として使ってもらえそうだという



ことで、試しに持っていきました。あまり知られていませんが、群馬県は、創作こけしの生産量日本一です。その中でも、卯三郎こけし



さんは、最大手で月産15,000個を生産して、全国、世界中に販売しています。伝統的なこけしだけでなく、スターウォーズこけしなど、秀逸なキャラクターこけしをたくさん製造しています。主な材料はミズキですが、サクラやクリなども使うそうです。伐採した木が、たくさんの工程を経て素敵な作品になっていく様子は、わくわくします！

今、「こけし」ブームが加速していることをご存知でしょうか。こけし好きの女子のことを通称「こけ女」ともいい、第三次ブームと言われるほどの人気があるそうです。



卯三郎こけし

〒370-3501 群馬県北群馬郡榛東村長岡 1591

TEL : 0279-54-6766

<http://www.usaburo.com/>

定年ですと言われ、東京の仮住まいから滋賀県高島市朽木（くつき）の家に帰ったのは、2013 年春のことでした。

それから7年。ずっと、地元の NPO「麻生里山センター」に所属して、森林公園「くつきの森」の活動をしています。森の事務所には週4日ほどかよっているのですが、活動というより「仕事」になっていて、小学生みたいに休みの日が待ち遠しくて仕方ないことがままあるのが困ったことです。

くつきの森は面積150ヘクタール。高島市の市有林です。その運営と管理を委託されているのが私たちのNPOです。

宿泊施設もあって、キャンプとか、企業の社員研修とか、やたらと元気な保育園の子どもたちが森を駆け巡り、ときには森の中で結婚式をしたいとか、年間延べ5～6千人の利用者があります。その受け入れはもちろん大切な仕事です。



企業の社員研修でも汗を流してもらっています

日常の森林管理は人手が圧倒的に足りないの、ボランティアさんの善意にすがっています。毎週木曜が「作業日」で、道を直したり、木を切ったり、薪をつくったりしてもらっています。男性4、女性1ですが、すごい戦力になっています。

つい先日、付き合いのある市内の里山 NPO の総会に招かれて、「森づくり」の話をしました。タイトルは「風景をつくる～3つの森から～」。その「3つの森」のひとつとして「上ノ原」での経験を使わせてもらいました。

3つの森の話をしながらあらためて思ったのは、藤原での10年は大きかったなあということです。朽木で茅刈りをする機会があったときなど、地元の古老に刈り方をほめられたのは上ノ原の茅刈りのたま

ものです。それからフットパス。藤原の道を思い起しながら、現在2つの古道を整備して歩いています。会員4人の「朽木フットパス研究会」も出来ました。

最近のことをもう少し紹介します。

「森のカルテづくり」。去年から始めた市民参加の「森林現況調査」です。矢作川の「森の健康診断」の仕方を教わり、くつきの森ぜんたいの健康チェックをしているところです。

「炭窯復活プロジェクト」。これも市民参加型です。壊れた炭窯を一から造っているところなんですが、3月には市内の炭焼きグループや個人が集合して交流会を開きます。

「落ち葉堆肥づくり」は雑木林の落ち葉活用。1年もすると腐葉土が出来、ポット苗や畑の土に利用します。子どもたちの森の土の教材にもなります。落ち葉掃きは楽しい作業なので、去年は生協の組合員さん親子といっしょにやりました。

地元の小学生とクヌギの森づくりもしています。3年生のときにタネをまいて、6年生のときに親子で記念植樹という活動です。今年で6年目。クヌギの山は将来、炭焼の原木林になればいいと思っています。

現在やっている活動は、まとめると下のような3つになりそうです。

「里山の魅力をつたえる」
「魅力ある里山をつくる」
「里山を守る仲間をふやす」

里山の魅力は自然や景観だけでなく、山の恵みを生かす知恵やわざも含まれます。炭焼きも落葉堆肥もそうだし、植物繊維を利用するという伝統技術もおもしろそうなので、最近シナノキやカラムシのことなど教わっているところです。そんな魅力も伝えられるようになればいいと思っています。

「魅力ある里山」というのはむずかしいのですが、私の敬愛する民俗学者の宮本常一さんの言葉にこんながあります。

「自然はきびしい。でも人の手が入ると優しく美しくなる。私はそんな場所を歩きたい」

大自然もすばらしいけれど、人の暮らしとともにあるような優しい自然もいい。「魅力ある里山」のひとつとして、そんな山を未来の風景として思い描いています。

けっきょく上の3つは、ぜんぶつながってぐるぐる回ってる。今年67歳になる私は、このぐるぐるサイクルにあと何年かわかるんだろうと思うと目眩がします。大事なのは、やっぱり若い「里山を守る仲間」へのバトンタッチなんでしょうね。

(NPO法人麻生里山センター・理事)

■野守のつぶやき(18)

～ 脚下照顧、令和の去年今年に思うこと～

●令和元年の師走、年賀状に込めた思い

利根川源流・みなかみ町
藤原で「飲水思源」を合言葉に「現代版入会」「地域丸ごと博物館」を標榜しつつ活動開始以来 15 周年の春先、上ノ原「入会の森」は文科省「ふるさと文化財の森」に指定されることとなった。

長きにわたり「井戸を掘って下さった」多くの地元・町役場ならびに会員・会友・諸先達のお陰と感謝しつつ首を垂れる思い。



向後は、屋根材にとどまることなく壁材(写真↑)、断熱材、飼料(←)や環境学習・憩い安らぎの場、生物多様性保全、水源涵養など広く生態系サービスの源としてお役に立ちたきもの。

●嬉しい悲鳴～相次ぐ希少種の出現！

・9月15日、上ノ原をご視察中のSさんが、クマタカのペアを上空に確認。写真はその時のもの。クマタカがスキと一緒に映っている写



真(下)は希少では！

しかも、4～5年前に増井幹事がほぼ同じ場所で幼鳥を見ており二度目の出会い。その意味するところをご示唆いただきたきもの。

- ・次は10月30日、麗澤学園「水源の森フィールドスタディ」の受け入れ中、インストラクターのIさんが発見した〇〇〇〇。れっきとした絶滅危惧種。以前から生育していたと聞いていたがほとんど諦めていただけに欣喜雀躍！（種名、場所とも非公開にてお赦しを）
- ・いずれも朗報だが、問題はこれをどう保全するか。どちらも難題、嬉しい悲鳴とはこのことか……。

●嬉しかったこともう一つ～断熱材の使い回し！

10月の茅刈りイベントに安藤先生や上野さんたち(茅葺文化協会、板倉構法学会)がご参加下さった時のこと。

福島の被災地仮設住宅(木造・板倉構法)に断熱材として使われた茅のその後が気になっていたのでお尋ねしたところ、何と次の現場に使い回されているとの由。およそ9年間も、断熱効果を失うことなく機能保持していたのだ。新しい用途の可能性を感じさせてくれる！

●残念に思ったこと

～ 諏訪神社夏祭りの中断

少子高齢化の極みにある下区の当番にて事情は分かるが、室町時代から八百余年伝承の獅子舞が見られなかったのは真に残念。一抹の寂しさを禁じえなかった。



●気がかりなことあれこれ

- ・シカの姿がモニターカメラによく登場している由。手遅れにならぬ様、赤谷に習って早めの対策が必要？！
- ・フットパスとしての古道の活用。藤原案内人クラブと協働して復活させた峠道二本。ユネスコ・エコパークの看板として、フィールドを活かす格好の武器では！役場当局のご認識は如何？
- ・地元の民宿・ペンションからの賀状に「雪が少なくて除雪は楽だが、スキー客が来なくちゃ飯が食えない」・・・、などなど。以上、まことに老婆心ながら。

●年頭所感～「五福祥来」に思う

Kさんより恒例の干支色紙に加えて「五福祥来」の絵札(写真)を頂戴した。辞書をひも解くと、五福とは「書経」にいうところの寿命、財力、無病息災、徳、天命全う、の由。昔はこれでよかったのだろう。だが現代なら、近隣友好、緑豊かな生活環境、気象安定、世界平和など加除修正願いたきもの。



本読みつ留守番すなり春隣り

青水

令和二年正月(青)

～編集後記～

令和最初の正月、十二支も子年に戻りました。

十二支は十二種類の動物のことですが、鬼門の方角を「丑寅」と言ったり、「草木も眠る丑三つ時」と言ったり、方角や時間の意味もあります。しかし、その根本は作物の生育段階を意味するそうです。「子」は種子の子で、最後の「亥」は骸(むくろ)の意味。この話を聞いた時、亥年生まれの私は落ち込みましたが、亥年が過ぎれば、また新しくなるのだと合点しました。

ともかく今年は物事が新しく始まる年回り。そんな気持ちで上ノ原に通いたいと思います。(稲)